

猪熊弦一郎展 Genichiro Inokuma Cats

2015年6月13日(土) - 9月27日(日)
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 展示室 A

主催：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団
協力：ilove.cat

猪熊弦一郎と猫達

猪熊弦一郎(1902-93)は70年に及ぶ画業のなかで、画風を幾度か大きく変えており、それぞれに代表的なモチーフがある。例えば、初期は女性像をモチーフに単純化した輪郭線でかたどった具象画を、ニューヨーク滞在時には直線を多用して都市の風景を抽象的に描き、ハワイのアトリエでは宇宙をテーマに色鮮やかで浮遊感のある抽象画を描いた。晩年は顔を格子状に並べた連作が良く知られている。そして、猫をモチーフに多くの作品をあらわしたのは、第二次世界大戦後、猪熊にとっては具象から抽象表現への過渡期とも言える1940年代後半から1950年代前半にかけてである。

猪熊がいつ頃から猫を飼っていたのか正確にはわかっていないが、もともと妻のほうが猫好きで、結婚してから猫を飼うようになったらしい。日記によれば、初めて猫を作品に描いたのは1933年、30歳のときであった(list no. b1)。猫を抱いて座っている妻が美しく、早速カンヴァスに描いたと記し、猫を描いたのはこれが初めて、と書き添えている¹。つまり、猫を飼うのも描くのも、妻がきっかけと言えよう。この頃の猪熊は、女性像を主なモチーフとして制作しており、妻・文子がモデルとなっているものも数多い。スケッチでも大量に妻を描いていて、なかにほんの数枚、妻の傍らに猫を描いたものがあるが(list no. b2-3)、明らかにまだ、猫をモチーフとは見なししていない。

1938年、猪熊は念願の渡仏を果たす。夫婦でパリに暮らし、アパートの管理人の飼い猫、キッキーを可愛がっていた²。フサフサした長い毛を持つこの猫を写実に描いたスケッチが数枚残っている(list no. b4-7)。パリでは、画家の藤田嗣治と出会い親交を深めるが、当時、藤田から猪熊に送られた絵手紙にも同じキッキーが登場していて、太い尾の猫が猪熊の後ろをついて歩く様子がコミカルに描かれている³。多少の線で簡潔に描いているにもかかわらず、猪熊が写実に描いたキッキーとよく似ていて、特徴をつかんでいることがわかる。1920年代にすでに猫を描く画家として知られていた藤田にしてみれば、目の前の猫を

ササッとそっくりに描くことなどお手のものだったろう。一方の猪熊は、このときもまだ、ごくたまに身近な猫を丁寧にスケッチする程度であった。

滞仏中に第二次世界大戦が勃発、パリの戦火が激しくなって、1940年に猪熊は最後の引き揚げ船・白山丸で帰国、その途中、船内で飼われていた猫をスケッチしている(list no. b8)。猪熊の猫の絵のなかでモデルが特定できるのは、今のところ、この船上猫とキッキーの2匹のみである。

帰国した猪熊は、戦時下、1941年に文化視察として、42、43年は従軍画家として戦地へ派遣される。腎臓を煩い帰国、東京での闘病生活の後、44年9月から46年の夏までおよそ2年間、神奈川県津久井郡吉野町(現在の相模原市)に2匹の猫を伴い夫婦で疎開する⁴。

猫は、疎開する前から再び飼い始めていたようで、戦中から戦後の数年間に描いたと思われる猫のスケッチが数多く残っている(list no. c1-17)。基本的に多頭飼いだったためか、スケッチも一匹だけのものは少なく、何匹かが一緒に描かれていることが多い。眠る猫、食べる猫、食卓を凝視する猫、ストーブに集まる猫、鶏に飛びかかる猫、椅子の上の猫、屋根の上の猫、母猫にまわりつく子猫等々、暮らしのなかの様々な場面での猫達を描いている。毛並みや表情を詳細に写実に描いた絵もあれば、輪郭を簡潔に捉えて一筆でかたどったもの、その輪郭線を何本も重ね最も良い形を探っているような絵もあり、積極的に猫を描き始めたことがうかがえる。と同時に、国家統制により表現が規制されていたこの時代、画家として身近な愛しいものたちを写実に描くより他なかったことも想像に難くない。実際、現在当館が所蔵するこの時期の油彩画には、戦前の思い切ったデフォルメや対比の強い色遣いのような猪熊らしい表現があまり見られず、小さなカンヴァスや板に人物や室内の風景を写実に描いて無難にまとめたものがほとんどで、点数も少ない。

46年の夏、猪熊は疎開先から東京の自宅に戻り、制作活動も徐々に活発化する。パリで出会ったアンリ・マティスの影響もあって、カンヴァスに明るい色調と太い輪郭線で女性像を描き、1949年頃からは、そこ

に猫が加わるようになった⁵ (list no. d1-2,f4)。女性、クッション、丸テーブルなど、丸みのあるものや柔らかいものを組み合わせ、主に曲線で画面を構成、そのなかに、猫もだらりと寝そべり、あるいはしなやかに尾を立てて、またはこんもりと丸まって、どれも柔らかなタッチで愛らしく描かれている。

この頃、猪熊は猫について以下のように述べている。

私の心はまだ猫を愛する心で一杯である。この愛する心をどこか他の処に置き忘れて来れば、もっと猫に対して苛烈な、無慈悲な気持ちで思い切って描いて行けるのではないかと思われる。これは私の心が出来なければ到る事が出来ない。これは何も猫丈の事ではないが大切な芸術家の道であらう⁶。

その実践であろうか、50年代に入ると、人物像は、美しさを前提とした女性像よりも、中性化、抽象化された子供や人として描かれることが増え、猫の愛らしさも影をひそめる。そして同じ人や猫というモチーフが、丸や四角や五角形などの図形を含んだ様々な形の集合であらわされるようになった (list no. d4,6,fl)。背景も分割され、カンヴァスのなかに生じた形が様々な色に塗り分けられて、画面は幾何学的な様相を増す。この時期の猪熊は、美術雑誌などで創作についての自身の考えを文章や

談話で発表する機会が増えるが、一貫して、絵として美しいこと、新しいことが目標であり、その美しさ (もしくは新しさ) を作るのは「色と形のバランス」だと述べている⁷。すなわち、上述の作品では、人や猫をモチーフに描いてはいるが、それらの存在や本質を表現することよりも、形を単純化し、必要があれば分割したり色や配置を変えたりして、視覚的に美しい (新しい) 絵を作ることに重きを置いているのだ。

53、54年頃には、茶色や灰色を多用した鈍い色彩の作品が増え、また、モチーフ一個体を複数の幾何学形に分割するというよりも、例えば猫なら、一匹の猫を極限まで単純化しデフォルメした輪郭線で描いたり、顔と胴体といった最小限に分割し、一枚のカンヴァスにいくつかの異なる抽象形態として配置する描き方 (list no. e9,10,15,20) が見られるようになる。その前の細かく分割した画面から、色と形の数を減らして、よりシンプルな構成でバランスを作り直しているようにも見える。

後年、この時期のことを自身で次のように振り返っている。

そのころの私の絵の傾向と云えば、具象と抽象の間の非常に煮え切らない“混合体”だった。心の中にはいつも、純粋になりたいという願望があったにもかかわらず、長い間具象の影がふっ切れなかった。私は、もう一度ゼロからやり直す必要があったのだ⁸。

a

- 1 題名不明 1986年 鉛筆・紙 153×102mm
- 2 題名不明 1971年 インク・紙 278×356mm
- 3 題名不明 1987年頃 インク・紙 181×188mm
- 4 題名不明 1987年 インク・紙 102×152mm
- 5 題名不明 1951年 インク・紙 267×205mm
- 6 題名不明 制作年不明 インク・紙 359×257mm
- 7 題名不明 1945年 インク・紙 263×183mm
- 8 題名不明 制作年不明 インク、水彩・紙 148×200mm
- 9 題名不明 制作年不明 インク・紙 274×390mm
- 10 題名不明 1985年 インク・紙 118×105mm
- 11 題名不明 1985年 インク、鉛筆・紙 118×106mm
- 12 題名不明 1985年 インク・紙 118×105mm
- 13 題名不明 1985年頃 インク・紙 118×105mm
- 14 題名不明 1985年 インク、鉛筆・紙 118×106mm
- 15 題名不明 1985年 インク・紙 118×106mm
- 16 題名不明 1985年 インク・紙 118×106mm
- 17 題名不明 1985年頃 インク・紙 118×106mm
- 18 題名不明 1985年 インク・紙 118×106mm
- 19 題名不明 1985年頃 インク・紙 118×105mm
- 20 題名不明 1985年 インク・紙 119×106mm
- 21 題名不明 1985年 インク・紙 118×105mm

b

- 1 題名不明 1933年 油彩・カンヴァス 412×275mm
- 2 題名不明 制作年不明 インク・紙 284×252mm
- 3 題名不明 1933年頃 インク・紙 280×249mm
- 4 題名不明 1938年 インク・紙 136×204mm
- 5 題名不明 1938年 インク・紙 136×204mm
- 6 題名不明 1938年頃 インク・紙 140×210mm
- 7 題名不明 1938年 インク・紙 141×210mm
- 8 船の中の猫 1940年 インク・紙 251×325mm

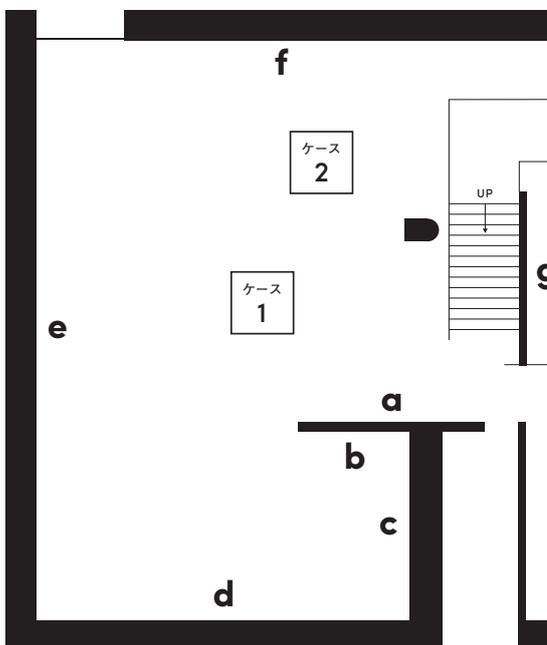
c

- 1 題名不明 1942年 インク・紙 431×304mm
- 2 題名不明 1945年 インク、水彩・紙 175×275mm
- 3 題名不明 1945年 鉛筆・紙 282×184mm
- 4 題名不明 制作年不明 インク・紙 290×250mm
- 5 題名不明 制作年不明 鉛筆・紙 239×236mm
- 6 題名不明 制作年不明 インク・紙 283×246mm
- 7 題名不明 制作年不明 インク・紙 283×245mm
- 8 題名不明 1946年 インク・紙 274×396mm
- 9 題名不明 1946年 インク・紙 275×397mm

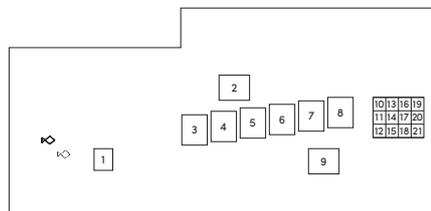
- 10 題名不明 制作年不明 インク・紙 257×365mm
- 11 題名不明 制作年不明 インク・紙 253×352mm
- 12 題名不明 制作年不明 インク・紙 367×257mm
- 13 題名不明 1950年 コンテ・紙 357×267mm
- 14 題名不明 1944年 インク・紙 258×357mm
- 15 題名不明 制作年不明 水彩・紙 257×356mm
- 16 三匹の猫 制作年不明 インク・紙 396×274mm
- 17 題名不明 制作年不明 インク・紙 261×363mm

d

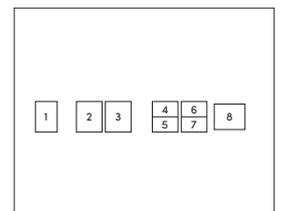
- 1 青い服 1949年 油彩・カンヴァス 790×645mm
- 2 裸婦と猫 1949年 油彩・カンヴァス 726×610mm
- 3 猫達 1952年頃 油彩・カンヴァス 905×1165mm
- 4 猫と住む人 1952年 油彩・カンヴァス 1308×1935mm
- 5 猫と食卓 1952年 油彩・カンヴァス 730×610mm
- 6 猫と子供 1951年 油彩・カンヴァス 920×655mm
- 7 題名不明 1951年頃 鉛筆・紙 181×111mm



a



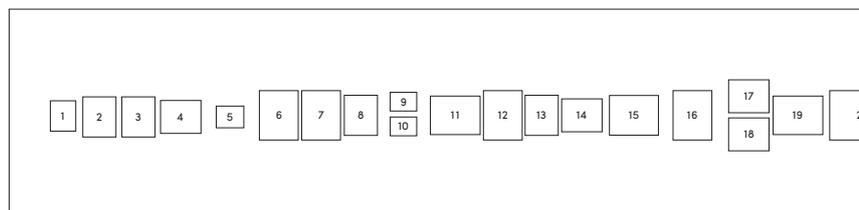
b



c



e



そんな思いを抱え、1955年、猪熊は渡米し、ニューヨークにアトリエを構えた。渡米をきっかけに作風がガラリと変わり、抽象画を描き始め、猪熊のキャンバス作品から具象物の姿が消える。猫達も同様に、キャンバスにあらわれなくなった。

1988年に顔の連作が始まり、猪熊のキャンバスにおよそ30年ぶりに具象物があらわれる。続いて、裸婦、馬、鳥等も登場するが、猫はほとんど出てこない。一方で、小さな紙やメモ帳には、1985年頃から盛んに猫が描かれるようになった (list no. a1,3,4,10-21 等)。そのほとんどが、鉛筆やペンで描いた線描で、簡潔な輪郭線であらわされている。40~50年代の大量のスケッチで身につけた猫の描写力が遺憾なく発揮され、どの線にも迷いが無い。目の前のものを写し取るのではなく、頭の中の猫達を、次から次に取り出しては描いているように見える。作為なく、ただ、描きたいから描く。そこには、猫への愛情と描くことの喜びがある。

では、50年代に描いた猫は、猪熊にとって、抽象表現への挑戦の過程で用いた形だけのモチーフだったかと言うと、それも違うだろう。ざっくり描いた肩甲骨の凹みにも (list no. e9)、幾何学的な分割にしか見えない画面に肉球を入れたり (list no. e22)、10匹 (たぶん) 潜ませたりしているのも (list no. e23)、犬で下絵を描いたのに本番で猫に変えているのも (list no. d6-7)、彼らを愛していたからに他ならない。なぜか。猪熊の目に猫が美しく映るからだ。猪熊は美しいものを愛する。妻も裸

婦も猫も、美しいから見ていたいし、描かずにいられない。その愛情が、結局は絵にあらわれている。

猪熊はよく同輩や後輩に、何かをつかむにはデッサンを1000枚描かねばならない、と語っていたそうだが⁹。今回、当館が所蔵する2万点の猪熊作品のなかから、猫が描かれた絵が700点強見つかった。本展ではそのうち168点を展示している。出品作のなかの猫は総勢900匹を超えた。と言うことは、1000枚ではないかもしれないが、間違いなく生涯に1000匹以上の猫を描いている。その結果、猫について猪熊がつかんだことは、もしかしたら、猫は抽象化できない、ということだったかもしれない。晩年は、顔、裸婦、馬、鳥とキャンバスに具象物を描くが、これらは具象でありながら、それぞれの形を抽象形態と見なして描いていた。しかし、そこに猫をほとんど加えなかったのは、猫に対する思いが強くて、抽象形態と割り切って描くことがままならなかったからではないか。描きたいように描くと、どうしても猫への愛が前面に出てきて、具象性が強まり、自身の表現したい内容にそぐわない。でも、小さな紙には、そんなことを気にせず思い切り描くことが出来た。これら大量の小品は、猫という小さな動物を知り抜いたのちにたどり着いた、猪熊独自の猫の表現なのである。

最後に妻のエピソードを添えたい。1988年、妻・文子が亡くなった。最愛の妻に先立たれた猪熊は、葬儀の日に1枚の絵を描く (list no. f3)。

e

- 1 題名不明 制作年不明 水彩・紙 340×275mm
- 2 題名不明 1992年 アクリル、インク、鉛筆・紙 407×320mm
- 3 題名不明 制作年不明 コンテ・紙 348×267mm
- 4 題名不明 1977年 墨・紙 275×370mm
- 5 題名不明 制作年不明 油彩・カンヴァス 317×410mm
- 6 題名不明 制作年不明 水彩・紙 618×472mm
- 7 題名不明 制作年不明 水彩・紙 623×469mm
- 8 題名不明 制作年不明 インク・紙 363×268mm
- 9 題名不明 1954年頃 油彩・カンヴァス 240×331mm
- 10 題名不明 1954年頃 油彩・カンヴァス 240×332mm
- 11 題名不明 制作年不明 インク・紙 474×623mm
- 12 題名不明 制作年不明 パステル・紙 623×471mm
- 13 題名不明 1954年 インク・紙 394×276mm
- 14 題名不明 1954年 インク・紙 292×375mm
- 15 猫達 1953年 油彩・カンヴァス 455×533mm
- 16 題名不明 制作年不明 パステル・紙 549×398mm
- 17 題名不明 1977年 墨・紙 275×371mm
- 18 題名不明 1977年 墨・紙 275×370mm
- 19 題名不明 1950年代 版画・紙 454×635mm
- 20 題名不明 1954年 油彩・カンヴァス 724×905mm
- 21 題名不明 1989年 パステル・紙 571×386mm

- 22 題名不明 制作年不明 水彩・紙 398×550mm
- 23 題名不明 1955年 水彩・紙 362×260mm
- 24 頭上猫 1952年 油彩・カンヴァス 455×378mm
- 25 題名不明 1987年頃 墨・紙 151×106mm
- 26 題名不明 1950年 インク・紙 149×119mm
- 27 題名不明 1989年 アクリル・紙 758×560mm
- 28 題名不明 制作年不明 インク・紙 267×203mm
- 29 自転車と娘 1954年 水彩、クレパス・紙 150×141mm
- 30 題名不明 1987年 色鉛筆・紙 276×395mm

f

- 1 猫によせる歌 1952年 油彩・カンヴァス 1815×2590mm
 - 2 題名不明 1951年 コンテ・紙 364×271mm
 - 3 葬儀の日 1988年 水彩・紙 435×621mm
 - 4 婦人と猫 1949年 油彩・カンヴァス 800×641mm
- ☆ 猪熊弦一郎と妻、文子と飼う猫達。椅子は猪熊手作りのもの。
1954年頃、撮影者不明。

g

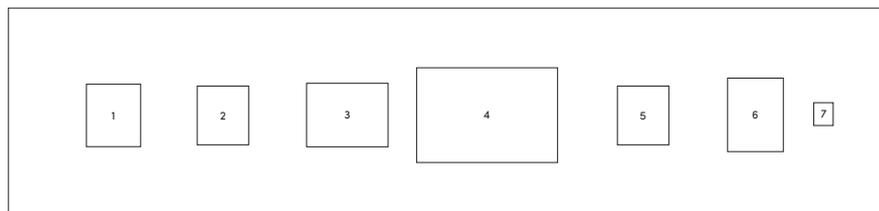
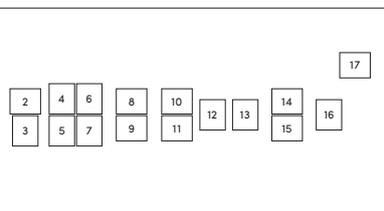
- 1 題名不明 1985年 インク・紙 118×106mm
- 2 題名不明 1985年 インク・紙 118×106mm
- 3 題名不明 1978年 水彩・紙 102×152mm

ケース1 1940年代から50年代にかけて描いた小品、オブジェ、猪熊デザインのテキスタイル、猪熊コレクションなど

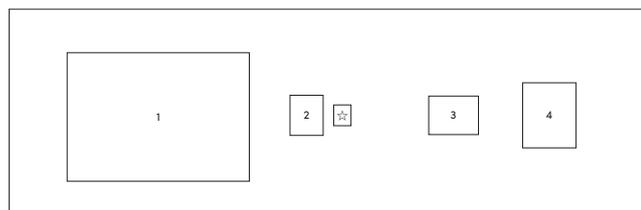
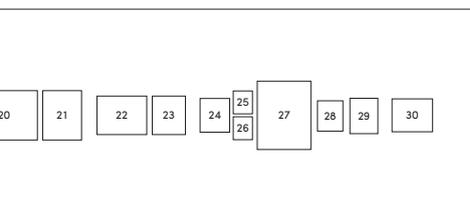
ケース2 1970年代から90年代にかけて描いた小品、表紙原画、猪熊コレクションなど

- 受付1 題名不明 1986年 インク・紙 153×101mm
受付2 題名不明 1986年 インク・紙 153×101mm

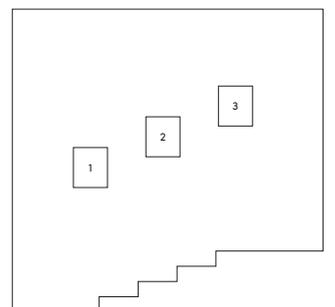
d



f



g



黒い絵の具で、中央に遺影のような、あるいは、棺の窓のような四角い枠に納まった女性の顔を描き、下に「FUMI」と名前を記した。しかし、その顔は、それまで猪熊が幾度となく描いてきた妻とは、どこことなく違って見える。亡くなった顔だからだろうか、もしくは、悲しみで妻の顔が描けなかったのか。そして、その不安を埋めるかのように、妻の周りにたくさんの猫を描いた。

古野華奈子（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／公益財団法人ミモカ美術振興財団）

1 当美術館所蔵の猪熊弦一郎の日記、1933年3月13日付。カンヴァスサイズ(六号風景)とメモ書きのような絵が記載されており、当館所蔵の油彩画(list no. b1)を指すと思われる。なお、猪熊が中学生のときに描いた猫の絵が当館に残されているため、本作は、画家が作品という意識をもって描いた、という意味において「初めての」猫だと考えられる。

2 猪熊弦一郎「巴里通信」(『新制作派第3号』pp.30-37、新制作派協会 1938年発行)

3 「藤田嗣治氏より猪熊弦一郎氏への書信」(『美術手帖 1950年4月号』pp.44-45)

4 猪熊弦一郎「みつちやん」(『猫』pp.29-39、中央公論社 1955年発行。新装版は中公文庫 2009年発行)

5 猪熊弦一郎のエッセイ「赤い服と猫」(『美術手帖 1949年11月号』p.62)に「昨年の始めから私は勇気を出してこの永い間見て来た猫を描いて見る事にした。」とあるため、1948年のカンヴァス作品にも猫が描かれている可能性があるが、現段階ではその存在を確認していない。

6 猪熊弦一郎「赤い服と猫」(『美術手帖 1949年11月号』p.62)より抜粋。

7 猪熊弦一郎「色と形」(『別冊アトリエ第1集』pp.41-47、1949年10月発行)

8 「アメリカへ」(猪熊弦一郎『私の履歴書』pp.108-111、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・財団法人ミモカ美術振興財団 2003年4月発行)より抜粋。

9 脇田和「千枚のデッサン」(『第57回新制作展図録』新制作派協会 1993年9月発行)

[作家プロフィール]

猪熊弦一郎／Genichiro Inokuma

1902 香川県高松市生まれ。少年時代を香川県で過ごす。

1916 旧制丸亀中学校（現 香川県立丸亀高等学校）に入学。在学中に描いた猫の絵が図画室に掛けられる。

1921 旧制丸亀中学校（現 香川県立丸亀高等学校）を卒業。

1922 東京美術学校（現 東京藝術大学）西洋画科に進学。藤島武二教室で学ぶ。

1926 帝国美術院第7回美術展覧会に初入選。以後、第10回、第14回で特選となるなど、1934年まで主に帝展を舞台に活躍する。

1933 初めて油彩画で猫を描く。

1936 志を同じくする伊勢正義、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、中西利雄、脇田和、鈴木誠と新制作派協会（現 新制作協会）を結成。以後、発表の舞台とする。

1938 フランスに遊学（1940年まで）。アンリ・マティスに学ぶ。藤田嗣治と知り合い交流を深める。

1944 神奈川県津久井郡吉野町（現 相模原市）に、猫を二匹連れて疎開する（1946年まで）。

1949 この頃より渡米前まで、猫をモチーフに様々な表現で多くの作品を描き、個展やグループ展に出品する。

1950 三越の包装紙「華ひらく」をデザインする。

慶應義塾大学壁画《デモクラシー》及び名古屋丸栄ホテル壁画《愛の誕生》に対し第二回毎日美術賞を贈られる。

1951 国鉄上野駅中央ホールの大壁画《自由》を制作。

1953 新聞で「ネコの猪熊」と評される（朝日新聞 1953年4月9日、p6）。

1955 猫好きな文化人たちによる猫についての随筆・小説集『猫』（中央公論社発行）に、飼い猫についてのエッセイ「みつちやん」が掲載される。同書の表紙絵と挿画も猪熊が描く。再度パリでの勉強を目指し日本を発つが、途中滞在したニューヨークに惹かれそのまま留まることとし、約20年間同地で制作する。渡米をきっかけに抽象画を描くようになる。

1973 日本に一時帰国中、病に倒れる。

1975 ニューヨークのアトリエを引き払う。その後、冬の間をハワイで、その他の季節は東京で制作するようになる。

1985-87 抽象画を描くかたわら、小さな紙やメモ用紙に猫を多く描く。

1989 丸亀市へ作品1000点を寄贈。

1991 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が開館する。

1992 所有するすべての作品などを丸亀市に寄贈する趣旨の文書提出。以降、順次丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に搬入。

1993 東京にて逝去。90歳。